

騎士様の使い魔  
4

### ▼ルチア

女騎士。エヴァリスを男性として意識しているが、素直になれずにいる。

### ▲エヴァリス

王太子秘書官。ルチアのことが好きで、積極的にアプローチしている。

### ▲アクセル

第二王子。王立魔術研究所のトップで、魔術師団の団長でもある。

### ▲ユリア

王立魔術研究所の主任研究員。魔術オタクで、アクセルを尊敬している。

### ▲セイエン

カイエンの孫。店を訪れたアーシェたちに対して攻撃的な態度を取る。

### ▲カイエン

薬草店の店主。路地裏でひっそりと商売しつつも、町の外の事情にも通じている。

## 登場人物 紹介

### ▲ライトリーク

サンクエディア王国騎士団副団長。29歳。アーシェを溺愛し、彼女が自分から離れていくことを極端に恐れている。

### ▲アーシェ

猫に変身できる女の子。17歳。ライトリークの専属侍女として充実した日々を過ごしていたけれど—？

### ▶アーシェ(猫)

変化の術で変身したアーシェの姿。



開け放った窓から、初夏の風がふわりと入り込む。

ポニーテールを揺らすそれを心地よく感じながら、私は手元の書類を次々と片付けていた。

「こんな日にお部屋にこもりきりなんて、もったいない……。あつ、レイド様ってば、二枚目にハンコ押さない！」

書類が二枚重なっていたから見落としたみたいだ。私はハンコが押されていない書類を、レイド様の机の上に広げて戻しておいた。

この部屋の主は、騎士団長であるレイド・グランツ様。そしてもう一人の主は、副団長のライト・ウオーロックだ。ライトは、私の恋人でもある。

今、二人は二週間後に控えた夜会の打ち合わせのため、中央棟にある会議室に行っている。

早いもので、私がここにお勤めするようになってから、一年が経とうとしていた。私はもうすぐ十八歳だ。

孤児院で育った私は一年前、悪い魔女にさらわれ、変化の術で猫にされてしまった。

その魔女から助けしてくれたライトの専属侍女として、このサンクエディア王国のお城で働かせて

もらえることになったのだ。

魔女のバックについていた貴族の陰謀に巻き込まれたり、ライトの昔の恋人と対決したりといういろいろなことがあって、あつという間に過ぎた一年だった。

それらを思い出していたら、コンコン、とノックの音が聞こえた。入り口のドアが開き、一人の騎士様が顔を出す。

「アーシエ、備品申請書を持ってきたんだけど……」

「はい、お預かりします」

お仕事は面白くてやりがいがある。ここに来られてよかったなあって、備品申請台帳に書き込みながらしみじみ思う。

一年前は右も左もわからず、周りの人に聞いてなんとかやっている状態だったけれど、今ではお仕事にもすっかり慣れた。レイド様やライトの助けになれるように、役に立てるようにって、自分なりに努力してきたつもりだ。

お仕事だけでなく、ライトとの関係も良好だった。ライトの束縛癖くわくへきや執着心は、以前よりかなり抑えられている。

たまに彼らが爆発して部屋から出してもらえなくなる日もあるけれど、それを除けばおおむね平和な毎日を過ごしていた。

書類を全部整理し終えた頃、せわしないノックの音が響いた。私がそつちを振り返る前に、ガ

チャッ、バタン！ とドアが大きな音を立てる。

びっくりする私の目に映ったのは、真つ赤な顔をして、肩で息をしているルチア・ウェスターさんだった。

「ど、どうしたんですか？」

「あの男は、もおおー!!」

そう言うなり、彼女は来客用のソファによるよると倒れ込む。

ルチアさんは、私より六歳年上の二十三歳。騎士団に所属する女性騎士だ。

背が高く、肩までの赤い髪が特徴的で、きりつとした顔立ちをしている。紺の制服と白いブーツがとても似合う。

剣の腕が立つ彼女は、実は貴族のお嬢様だというから意外だ。でも話していると楽しいし、優しくよく相談にも乗ってくれる、私にとってはお姉さんみたいな人。

礼儀作法をわきまえているはずの彼女が団長室に乱暴に飛び込んでくるなんて、どう考えても普通じゃない。そして『あの男』と言うからには、原因は一つしかないわけ——

「あの……エヴァリス様と何かあったんですか？」

私が恐る恐る聞いたとたん、ソファに突つ伏ふしているルチアさんの肩が大きく跳ねた。

エヴァリス・トルクスターン様は、ラズウェル王太子殿下の秘書官を務めている。物腰が柔らかくて、いかにも貴族らしい整った容姿を持つ、有能な秘書官だ。その上、剣の腕は騎士様にも劣らない。

そんなエヴァリス様とルチア様は数ヶ月前、ライトが昔の恋人に拉致された事件の時に、協力してくれた。それ以来、エヴァリス様がルチアさんを気に入って、追いかけて回しているらしい。

「もうっ！ しつこいんだ、あの男！」

耳まで真つ赤に染めたルチアさんが、拳でドンっ！ とソファの座面を叩いた。その手に握られている書類は、すっかりくしゃくしゃになってしまっている。これ、レイド様に提出するものなんじゃないのかな？ 大丈夫かしら。

舞い上がった埃を手でパタパタと払いながら、私は苦笑する。そしてお茶の用意を始めた。私がお茶を淹れている間も、ルチアさんは早口で文句を並べ立てている。

「行く先々に現れては、しつこく絡んできてさ！ 次の休みは町に行こうとか、どこかに出かけようとか……私は何度も断ってるのに！」

「せつかくのお誘いなんだから、行ってきたらいいじゃないですか」

「い、い、行っただけ！ あいつ、すぐ手をつなごうとしてくるんだよ！」

「さすがエヴァリス様、積極的ですね！」

「私にとってはいいい迷惑だ！」

ますます真つ赤になったルチアさん。握りしめた手が、ふるふると震えている。

私にはのろけ話にしか聞こえないし、お似合いだと思っただけだな。

ルチアさんの性格を考えるに、本当に嫌ならきっぱり断っていると思う。きっかけさえあれば、あつという間にくっつきそうな気がする。

「今日なんか、物陰に引つ張り込まれて、だつ、だつ、抱きし……っ!!」

「え、抱きしめられたんですか？」

「言うなっ！」

がばつと顔を上げたルチアさんのほっぺたは、湯気が出そうなくらい真つ赤だった。年上の女の人に対して失礼かもしれないけど、すごくかわいい。

私は小さく笑いながら、テーブルにお茶のカップを置いた。

「とりあえず落ち着きましょうか」

「あ、ああ。ありがとう」

少し冷静になったのか、ルチアさんは乱れた髪や制服をささつと整え、ソファにきちんと座り直した。

「マテ茶に、ちょっとだけ花茶を混ぜました。精神を安定させる効果があるそうですよ」

「ほんとだ、花の香りがする」

静かに香りを確かめ、ルチアさんはゆっくりとカップを傾けた。

私も同じものを自分のカップに注ぎ、ルチアさんの向かいに腰かけて口に含む。

うん、うまくできてる。この前、ライトのお姉さんであるエルサーナ・ウォーロックさんから、お茶を淹れるのがずいぶん上手くなったってほめられた。

エルサーナさんはお茶淹れの名人で、このお茶の作り方も、彼女の直伝だ。

お茶の効果はてきめんで、ルチアさんは肩の力が抜けたみたい。でも、困惑と恥じらいが入り混

じつたような表情を浮かべている。

「さっきの話ですけど、いきなり抱きしめられたんですか？」

「いきなりというかなんというか……よくわからないんだ。いつも通り声をかけられて、いつも通り言い返してただけなのに、急に……なんか雰囲気が変わって、びっくりして……」

言葉を探しながら話すルチアさんの戸惑いは、よくわかる。私にもこういうこと、よくあったから。

「それで？」

「怖い顔になったあいつに、人がいないところに連れて行かれて、それで……」

その時のことを思い出したのか、ルチアさんはまた真っ赤になってしまふ。

いつもはきりっとしていてかっこいいのに、こういう初々しい一面も持っているところが、ギャップがあつて素敵だと思う。

それにしてもエヴァリス様、今回はちよつと強引すぎるような……

二人が会つてから、もう半年くらい経つ。その間、ずっと地道なアプローチを続けていることを考えると、相当ルチアさんに夢中なのかも。もしかしたら、その気持ちを抑えきれなくなっているのかな？

でも、大事なのはルチアさんの気持ちだ。

「どう思つたんですか？ 嫌だつたとか、怖かつたとか」

「別に、嫌つてわけじゃないけど……」

「じゃあ、恥ずかしかつたんですか？」

「それもあるけど、それだけじゃなくて……。あー、もう！」

そう言つてルチアさんが頭を抱えた時、再びノックの音が響いた。私は席を立ち、入り口のドアを開ける。

「はい」

「あつ、こ、こんにちは！」

ドアの前に立っていたのは、ユリアさんだった。いつもと同じく眼鏡をかけ、くせのあるふわふわの髪をツインテールにしている。何やらもじもじしている彼女の手には、大きな白い箱があつた。

「ユリアさん！ どうぞ入ってください。ルチアさんも来てますよ」

「本当？ 失礼します」

ユリアさんは王立魔術研究所の主任研究員で、彼女もまた、ライトが元恋人に拉致された事件の時に助けてくれた。魔術師でもある彼女は探索術の使い手で、主に遺跡の調査をしているらしい。

魔術オタク……と言えなくもない一面を持っているけれど、天然でまじめで一生懸命で、すごくかわいい人だ。

王立魔術研究所は、第二王子であるアクセル様の直属機関。アクセル様は強大な魔力を持ち、王国一の魔術師と呼ばれる天才で、魔術師団の団長でもある。数年前に魔術研究所を作った彼は、地方に住んでいたユリアさんを自らスカウトしてきたそうだ。

そのユリアさんは、今ではアクセル様の片腕とまで呼ばれている。いつもほんわかのかんぱりして

いるけれど、魔術やアクセル様の話になると熱が入って止まらなくなるのだ。

私とユリアさん、そしてルチアさんの三人は、一緒に遺跡調査に出かけて以来、良好な関係が続いている。たまに三人でお茶会をしたり、町に遊びに行くこともあるのだった。

「お茶、どうぞ」

ソファに座ったユリアさんにお茶を勧めると、彼女は愛嬌のある顔でふわりと笑った。

「ありがとう。レイド様とライトリーク様はいらっしゃらないんですか？」

「二週間後に夜会があるでしょう？ その打ち合わせのために、総務部に出向いています」

「そうですか……夜会の」

そうつぶやいたユリアさんの顔に影が差した。けれど、ほんの一瞬のことだったので、私はあまり気に留めなかった。

今回の夜会は王室主催で、国内の貴族たちを招いて行われる。今年社交界にデビューする貴族の子弟をはじめとして、比較的年若い男女が参加する予定だという。本格的な社交シーズンを前にして、予行演習みたいなものらしい。

ただ実際のところは、アクセル様の花嫁選びのための夜会だろうと言われていた。

アクセル様は魔術に没頭するあまり、結婚にはまったく興味がなみみたいで、今まで浮いた噂の一つもない。そのため、誰が花嫁候補に選ばれるのかという話題で、城中が大いに盛り上がった。

ユリアさんは気を取り直したように、白い箱をテーブルに置く。

「先日の水晶谷<sup>すいしょうたに</sup>での遺跡調査の際、騎士団の方々に護衛していただいたので、お礼にこれを買ってきたんです。ルシーダ菓子店の新作なんですよ！」

先週、ユリアさんは遺跡調査のために二週間ほど留守にしていた。水晶谷遺跡と呼ばれるその遺跡は、危険な猛獣が生息する深い森の奥にある。だから護衛として騎士団が同行したというのは、私も報告書を見て知っていた。

そしてルシーダ菓子店は、城下町にある有名な菓子店だ。そこのお菓子はお土産や差し入れに使われることも多いので、騎士団にもファンがたくさんいる。

ルチアさんが、目を輝かせて声を上げた。

「うわあ、新作!? せっかくお茶を淹<sup>い</sup>れてもらったことだし、すぐに開けてみたいけど……」

「レイド様にお見せしてからじゃないと、だめですよね」

私はため息をついて、箱にじつとりした目を向けた。騎士団への差し入れなのだから、レイド様に見せる前に開けることはできない。でも、中身を聞くくらいはいいよね？

「今回の新作って、なんですか？」

「新作はたくさんあったけど、今回はタルトにしたんです。ベリーと、桃と、ナッツの三種類」

「すごい！ 聞いただけでおいしそう！」

ルチアさんがまた歓声を上げる。赤、ピンク、茶色とグリーン。色とりどりのタルトを想像したら、勝手にごくりとのが鳴る。

今度はルチアさんがユリアさんに尋ねた。

「他には何が出てた？」

「季節のドライフルーツを使ったパウンドケーキがありました。自分用に買ってみたんですけど、お酒がきいてておいしかったですよ！あとはフルーツのジュレと、パイと、ナッツのクッキー。中にフルーツソースを閉じ込めたチョコレートケーキもありました。お店で食べてる人がいたんですけど、フォークで切ると、中からソースがとろっと出てくるんです！あれはおいしそうだったな。そのお客さんも一口食べて、おいしい！って言ってましたもん」

「うわあ、それはすごく食べたいです！」

私もおいしそうなケーキを思い浮かべて、つい歓声を上げてしまった。

「じゃあ、今度のお休みに一緒に行きませんか？」

「それはいいね！」

「賛成です！」

ユリアさんの言葉に、ルチアさんと私がきゃあつと盛り上がった瞬間——ガチャリとドアの開く音がして、私たち三人は飛び上がった。

「お前たち、騒ぎすぎだ。廊下まで声が聞こえている」

お腹に響くような低い声で言ったのは、騎士団長のレイド様。

見上げてしまうほどの長身に、がっしりした体躯。夜色の髪をざつと後ろに流して、眼光鋭い三白眼はいつ見ても迫力がある。ただでさえ怖そうなのに、今はその眉間に深いしわが刻まれているので、私たちは思わず固まってしまった。

「まあまあ、いいじゃん、華やかで。西棟は女の子少ないし、貴重だろ」

あとに続いて入ってきたのは、ライトだ。

騎士団の副団長で、ウォーロック公爵家の次男。柔らかそうな金茶色の髪に、深いブラウンの瞳、端正な顔を持つこの人は、私の雇用主であり、大事な恋人でもある。

レイド様は、そんなライトの言葉を一蹴した。

「時と場合によるだろう。就業時間内に、廊下まで聞こえるほど騒ぐものではない」

口調は落ち着いているけど、威圧感ハンパない。

「もっ、申し訳ありませんでした！あ、これ、ソシミ村からの四人移送についての報告書ですっ」

「お邪魔して申し訳ありませんでした！これ、先日のお礼をかねた差し入れです！皆さんで召し上がってくださいっ」

ルチアさんはさつき握りしめてしわになってしまった報告書を青ざめた顔で掲げ、ユリアさんは泣きそうになりながら、お菓子の箱を差し出している。

するとレイド様は、ふっと表情を緩めた。

「わかればいい。アーシエ、お茶をくれ。せつかくの差し入れだ、みんなでいただくこう」

「はい、すぐに！」

レイド様は外見は怖いけれど、思いやりがあつて懐も深い。言うべきことは言うけれど、大抵のことは大目に見てくれる。上司としては最高の方だと思う。

団長室の一角には、お茶の道具などが入った小さな戸棚が据え付けられている。私がそこでカッ



ブやポットを準備していると、後ろに誰かが立って、肩越しに手を伸ばしてきた。

「俺、今日はこのお茶がいいな」

耳元で響く声は、ライトのもの。彼は大きな体で、私に覆いかぶさるようにしている。背中に彼の体温を感じる。こんな距離感にはもう慣れたはずなのに、未だにどきどきしてしまう。ライトは棚の上段から取った茶葉の缶を、トレイの上にとんと置いた。その手が、そっと私の肩にのせられる。

「さつきはずいぶん楽しそうだったね。俺といる時にはあんまり出さないよね、ああいう声。女同士だと、やっぱり違うのかな」

笑みを含んだ声がすぐ近くから聞こえ、耳に吐息がかかる。肌がちりちりと感じるのは、たぶん、ライトの嫉妬の炎だ。

私は手を止めることなく、ポットに茶葉を入れていく。けれど……その指が、震える。

「うるさくしてごめんなさい」

「いいよ、かわいかつたから。でも——」

柔らかくて温かいものが、耳に触れた。

「今度は、俺にも聞かせて」

そんなささやきを残して、ライトはさっと離れていった。

とたんに感じるのは、喪失感。

ここが、団長室じゃなかったら。他に誰もいなくて、二人きりだったら。

あのまま彼の胸に、身をゆだねてしまっていたかもしれない。そうなくてもおかしくなくらい、私はライトの色に染まっていた。

ライトは甘い声と言葉で、いつも私を誘ってくる。そして私はそれに流されないように、日々闘っていた。

幸せすぎて、ちょっと困る。それが今の私の日常だった。

「お待ちせしました、お茶が入りました」

私はレイド様とライトに、笑顔でお茶を振る舞った。そしてお菓子の箱を開け、ルチアさんと二人で歓声を上げる。

「ベリーも桃もきれい！ おいしそう！」

「うわー、ナッツがぎつしりだね！ 香ばしい香りがする」

ふわりと漂う甘い香りとおいしそうなた目に、私とルチアさんは夢中になってしまった。

「どれもおいしそうでしょう？ お好きなのを選んでくださいね！」

ユリアさんがにこにこしながら言ってくる。

そして私たちはどのお菓子にするか、相談し始めた。さつきレイド様に注意されたから、声のボリュームは控えめに。でも女の子なんだから、甘いものを前にして興奮するなんてほうが無理よね。ひそひそ話しながらも、声の代わりに身振り手振りが大きい私たち。それを見て、ライトはおかしそうに笑っているし、レイド様もうつすらと笑みを浮かべていた。

結局、レイド様とルチアさんはベリー、私とユリアさんは桃、ライトはナッツを選んだ。

ユリアさんは布にくるんだお菓子を持って、そのまま研究所に戻っていく。

「魔法薬の反応を調べるために、結果が出るまでしばらく放置してるんです。そろそろ時間なので、様子を見に戻ります」

「そうだ。最近は遺跡調査だけでなく魔法薬の研究もやって、かなり忙しいみたい。」

レイド様とライトは、お菓子をぼいっと口に放り込んで終了。小さいから男の人には物足りないかもしれないけど、もうちょつと味わったらいいのに……

私とルチアさんは、お茶とお菓子を十分に堪能した。タルト生地はさくさくで、中のカスタードクリームは濃厚。フルーツはとつてもみずみずしくて甘い。

「あとでユリアに休みの日を聞いてみるよ。都合のいい日があったら、三人で食べに行こう」

「いいですね！ 楽しみ！」

「じゃあ、あとで連絡する。……それでは戻ります。失礼しました」

「待て、ルチア。夜会の件で話がある」

「はい？」

立ち上がったルチアさんを、レイド様呼び止めた。

「前回の夜会の時、酔った男性客が女性専用の休憩室に入り込むという一件があっただろう。覚えてるか？」

「はい」

夜会の際はいつも、急病人の救護や衣装直しなどに使えるよう、男女別の休憩室が設けられる。

三ヶ月前の夜会の時、酔った男性客が間違えて女性用の休憩室に入り、一人で休んでいた女性客と鉢合わせしてしまったのだ。

幸い、男性は酔っていたとはいえ良識ある人だったようで、すぐに退室したから、大事にはならなかったって報告書に書いてあった。

「そういえば、その報告書を書いたのはルチアさんだったっけ。」

「私がそんなことを考えていたら、ルチアさんが口を開いた。」

「夜会後の報告会で、こう申し上げた記憶があります。『今回はたまたま何もなかったからいいものの、休憩室の周囲に警備の人間が一人も配置されていなかったのは問題だ』と。『せめて、女性の休憩室のほうだけでも、警備の騎士を置くべきだ』とも」

その言葉に、レイド様がうなずく。

「その件だが、今回から女性用の休憩室周辺に、女性の騎士を置くことになった」

「本当ですか!？」

ルチアさんの声のトーンが上がった。

「ああ。悪意を持った人間が侵入しないとも限らないからな。むしろ今まで何もなかったのは幸運だったと思う」

「そうですね。貴族の屋敷で催される夜会では、いろいろな事件が起きています。王宮もそうした事態に備えるべきだと思います」

「こういう視点は、貴族の出身であるルチアさんならではのかもしれない。」

ルチアさんの力強い声に、レイド様は軽くうなずいた。

「それでは三人一組の班を三つ作り、交代で休憩室に配備する計画を立ててみる。人選は任せる」  
「了解しました。後ほど警備計画書を提出します」

敬礼して、颯爽と出ていくルチアさん。その姿は、さっきまで私たちと一緒ににはしゃいでいたとは思えないくらいかっこよかった。

ライトがカップを置いて、頬杖をついた。そしてお茶を飲みながら書類に目を通すレイド様を見る。

「ルチアにこういったことを任せるのは、初めてかな？」

「そうだな。いろいろ経験も積んできているし、いい機会だろう」

「もしかしてレイド、ゆくゆくはルチアを隊長にした女性だけの隊の設立も考えてるとか？」

どこか面白がっている風なライトの言葉に、レイド様はカップを置いて腕を組んだ。

「飛躍しすぎだ。作ったところで、現状は使いどころがない。だが、もし試験的に導入するとしてら、ルチアは隊長候補の一人だな」

こうして二人が騎士団のことについてあれこれ話し合っている光景は、よく見かける。私は彼らの話をいつもそばで聞いているけれど、二人から口外するなど言われたことはない。

それはライトだけでなく、レイド様からも信頼されている証だと私は思っていた。

まだ一年。でも、もう一年。ここで着実に積み重ねてきたことの成果だと考えれば、少し自信がつく。

(さあ、私も仕事モードに切り替えなきゃ)

私は空になった五人分のカップを片付けて、振り返った。

「お二人が留守の間に回ってきた書類を整理しましたので、ご確認ください。それから、明日以降のスケジュールに新たに入ったご予約について報告します」

お城で働くことになってから、私はライトの部屋で暮らしている。その前は城下町にある教会の孤児院で、大勢の子供たちと一緒に暮らしていた。

狭い部屋でベッドを分け合い、小さい子たちの面倒を見ながら過ごした日々。貧しかったけれど温かくて、私の大事な思い出になっている。

ここでの生活は、あの頃とは真逆だ。広くて豪華な部屋に、贅沢でおいしい食事、きれいで新しい服や靴。それ以外にも、望めば大抵のものは手に入る。

だけど、私が欲しいのはそんなものじゃない。孤児院にいた時と同じ、大切な人と一緒に過ごす時間だ。

今日の夕食は、魚介を煮込んだトマトスープ。それにパン、サラダ、フルーツがついている。食事はお城の厨房から、配膳係の人がカートにのせて持ってきてくれるのだ。

ライトと二人でお皿を並べて、好きな飲み物を選んで、お互いのグラスに注いで。

向かい合って座って時々目を合わせながら、ゆっくり食事をする。

最初のうちは、お互いをもっと知りたいと思って、たくさん話をしてきた。会話自体はその頃に

比べれば、少なくなっただと思う。でも会話がなくても、静かに流れる沈黙は穏やかで、甘くて、温かい。

こうして落ち着くまでには、いろいろなことがあった。

私は大勢の人と同じ部屋で暮らしていたけれど、ライトはずっと一人暮らしだった。だから私がライトの身の回りのことにあれこれと手を出すのを、以前は無遠慮だと感じることもあったみたい。逆に、私のほうがストレスを感じることもあった。ライトは今まで恋人が何人もいて、夜に抱き合って過ごすのが普通だったようだけど、私にとってはライトが初めての恋人だから、すごく緊張して疲れてしまったのだ。

けれど一年過ぎすうちに、そういう生活習慣の違いを、うまくすり合わせる事ができた。

ライトが女の人と夜を過ごしてきたのには理由があった。

彼は小さい頃に誘拐され、その時一緒に連れ去られた女の子を、目の前で惨殺されている。一人で寝るとその時のことを夢に見て、一晩中うなされていたらしい。

でも、私と出会ってから、ライトは変わった。私がそばにいるだけで、熟睡できるようになったんだって。

ライトは私が離れていってしまうことを、極端に恐れている。だから、私を試したり、束縛したりしようとする。そんなことをしちやいけないうって頭ではわかっていても、どうしても不安になっってしまうみたいだ。

彼の不安を少しでも解消できればと思った私は、結婚宣誓書を作って署名もした。

それは団長室にある私の机の引き出しの中で、ライトの名前が書かれる日を待っている。

そんなことを思い出しているうちに、食事が終わった。

食器を片付けたあとのテーブルの上には、小さな焼き菓子が盛られたお皿と、ハムやチーズがのったお皿が一枚ずつ。

私はソファでお茶を楽しみ、ライトはグラスで果実酒を飲んでいる。

ライトの左手は私の肩に回されていて、片時もそばから離そうとしない。時々その手が下におりていきそうになるのをたしなめながら、私はライトの腕に身を任せていた。

「そういえば、今日レイド様がルチャさんに任せた仕事って、報告会の時にルチャさんが出した意見が元になっているのよね？」

「ああ。休憩室で騒ぎが起きた時、その場に駆けつけたのはルチャだったからね。あの時はホールの外の警備を担当させていたんだけど、以前から休憩室に警備がつかないのが気になっていたみたいだ。で、様子を見に行ってみたら案の定だったらしいよ」

騎士の人たちは主に、王室の方々がいるホールや控室に配置される。それにお城は広いから、全館に騎士を配置することはできないみたいだ。

「私もルチャさんの意見には賛成。私だって知らない男の人が急に部屋に入ってきたら、何もされなくても怖いし」

「それはもつともだと思うよ。まあ、レイドが休憩室のことを気にしている理由は他にもあるんだけど」

「え、何？」

ライトはちよつとためらうようなそぶりを見せてから、軽くため息をついた。

「……エルが王妃陛下の専属になったあと、夜会の最中に襲われたことがあるんだ」

「エルサーナさんが!？」

私がびつくりしてライトの顔を見上げると、彼は眉をひそめて自分の髪をかき回した。

「ああ。襲ったのは、エルの元婚約者だ。ありきたりな話だけど、ウォーロック公爵家の名前目当てでエルに近づいておきながら、実は愛人がいましたってパターンでさ。エルのほうから婚約を解消したんだ。その後、エルは王妃陛下の専属侍女として城に上がることになったんだけど、その家の婚約解消を機に傾いたらしい。エルを逆恨みして一年近くの間、仕返しの機会をうかがっていたそいつは、たまたま夜会の最中にエルが一人になったところを襲った。それを助けたのがレイドってわけだ」

「それが二人の出会いってこと!? すごい、恋愛小説みたい!」

「そっちに反応するのによ!」

だって、素敵な人に危ないところを助けてもらうなんて、女の子の憧れでしょ!

そりゃあ、危ない目になってあわないほうがいいに決まっている。だけど、それを乗り越えた今、レイド様とエルサーナさんはすごく幸せなんだから、やっぱり恋愛小説を地で行ってるって思ってもいいよね?

「もちろんライトが言いたいのはそこじゃないって、わかっているわよ。招待客だけじゃなくて侍女

や侍従も、危険な目にあうかもしれないってことよね。できれば城内のいろんなところに騎士様がいてくれたら、心強いんだけど」

「俺もレイドも、それはわかってるんだけどね……」

真剣な顔で言って、ライトはグラスをテーブルに置いた。その手が私の頬に触れて、顔を上に向けられて――

濃いブラウンの瞳に、とらわれる。

「ん……」

軽く触れた唇はすぐに離れた。淡く散ってしまったためぐもりに、物足りなさを感じる。そんな自分が恥ずかしかった。

「夜会には多数の人が招かれる。その中に変質者や危険人物がまざっていないとも限らない。でも国外からの客人を招く夜会は規模が大きいから、そこにいる人間をすべて監視するなんて、無理な話だ。どうしたもんかな……」

私の髪を撫でながら、ため息をつくライト。

前々回の夜会では、魔術師の侵入を許してしまった。そして前日も、警備の盲点をつく形で思わぬ騒ぎが起きた。

騎士団は、警備体制の見直しを迫られているのかもしれない。

そこでふいに、私はひらめいた。

「別に、騎士団が見回る必要はないんじゃない?」

「え？」

私の言葉を聞いて、ライトが怪訝けげんそうにこちらを見た。

「魔術師に追いかけられた時、近くに騎士様がいらないなら、せめて何か危険を知らせるものがある方がいいのと思ったの」

「危険を知らせるもの？ 例えば？」

ライトが真剣な表情をして、ソファに座り直す。まじめに答えなきやいけない雰囲気だ。

そう思って、ライトにしなだれかかっていた私も体を起こした。

「ええと、触ると大きな音が出るものとか？ うーん、うまく言えないけど……『助けて！ 私はここよ！』って一発でみんなに伝わる道具とか術とかないのかなと思って。それなら離れた場所にいる人でも、すぐに駆けつけられるでしょう？ 危険な目にあつてる本人じゃなくて、そういう場面を見かけた人も助けを呼べるだろうし。侍女や侍従みたいな戦えない人でも、それならできるとよね」

「なるほど。警備じゃなくて、監視の目を増やすってことか。……うん、いいかもしれない。明日レイドに話してみるよ。アーシェ、ありがとう」

ライトが微笑みながら、また手を伸ばしてくる。顔を引き寄せられて、彼の表情が艶めなまかしく変わったのを見た瞬間、私は目を閉じた。

優しいキスはやがて深くなっていき、私の息が上がる頃、ライトはやっと唇を離した。そして私は、彼に抱き上げられる。

「せっかくないいヒントをくれたから、お礼をしなきやいけないね」

「お礼……？」

ライトはにっこり笑うと、私を抱きかかえたまま寝室に入った。

ま、まさかお礼って、えっちなことする気じゃないでしょうね！

「ちよ、ちよと待って！」

「遠慮しなくていいよ。めちゃくちゃお礼がしたい気分だから」

「いや、いらなからっ！ なんでこうなるの!? 今、そういう雰囲気だった!？」

じたばたもがいても、私をがっちり抱え込む腕から逃げられるわけがない。

ライトはベッドをスルーして、バスルームへ続くドアを開けた。

「やーっ！ 絶対お礼なんかじゃない！ 明日起きられなくなっちゃう！」

「暴れると落ちるよ」

「きやあっ！」

腕の力を緩められて、落ちそうになった私は反射的にライトにしがみつく。すると、彼はにやりと笑った。

「黙って受け取ってくれればいい。今夜はアーシェが『もつと』って言って泣くまで、放さない」  
ライトの腕に、ぎゅうつと力がこもって、私は息を呑む。体の奥底に熱い泉が湧いて、震えがきた。

ライトは私を床に座らせ、部屋着を脱ぎ捨てる。



ほどよく筋肉の付いた体は、服を着ている時に想像するよりたくましい。思わずじっと見つめていると、甘い笑みを浮かべたライトが、私の頬を撫でた。

「そんなに見られたら、穴が開きそうだよ。でも、もつと見る？」

「……っ」

からかうように言われて、私は思わず視線を逸らした。すると、くすりと笑われて、恥ずかしさのあまり真っ赤になってしまう。

「見たいの？ 見たくないの？」

「そんなの知らない！」

追い詰められた私は、そう答えるので精一杯だった。

すると、ライトが私の目の前にしゃがみ込んだ。その視線がまるで舐め回すかのように、私の体をゆっくりとなぞっていく。

「アーシエは自分で脱ぐ？ それとも脱がせてほしい？」

「どうして、そんないじわるばっかり言うのお……」

「そんなの、アーシエの反応がかわいいからに決まっている」

そう言ってライトは私を立ち上がらせ、唇を重ねた。

すぐに熱い舌が割って入ってきて、歯列を舐めてこじ開け、私の舌に絡みつく。

「んっ、う……」

部屋着のワンピースをたくし上げられ、そのまま脱がされてしまった。ライトの手は躊躇なく下

着をも脱がせ、私はあつという間にすべてをさらけ出してしまう。

抱きしめられると、彼の体の熱が、私に移ってくるみたい。

「あ……っ、だめ……！」

我慢できないとでも言うかのように、何度も何度もキスが降ってくる。大きな手が私の体を這い回り、背中、お尻、肩、胸……どこに触れられても、私は反応してしまふ。

「いい声。かわいい。聞いているだけで勃つ……」

「やつ！」

かすれた声でささやかれて、腰を押し付けられる。彼の下着越しに感じた硬さに、私は小さく悲鳴を上げた。

これからライトの手管に翻弄されて、彼の好きなだけ啼かされるんだ……

背筋がぞくりとしたのは、期待なのか、恐れなのか。それとも、喜んでいるの？

蹴るようにしてズボンを脱いだライトが、私の顔を見下ろしてくる。至近距離にある濃いブラウンの瞳は、隠しきれない情欲の炎で私の肌を焼いた。

「さっきはお礼って言ったけど、本当はそんなじゃない。俺は今、アーシエが欲しい。だから抱く。それだけ」

欲しい、欲しい、欲しい、欲しい。

ライトの目が、そう叫んでる。

こうして強く求められることに、私はもう慣れてしまった。

……体の奥が濡れる。

「お願い、ひどくしないでね……」

両腕をライトの首に回して、しがみついた。

「そんな余裕あるかよ！」

低い声で唸ったライトと、もつれるようにバスルームになだれ込んで。

ライトの手が、乱暴にドアを閉めきった。

## 2

夜会当日、場内は華やかな空気と緊張に包まれていた。

せわしなく行きかう侍従や侍女。あちこちで談笑している貴族たち。これまで何度か目にした光景とはいえ、日常とは違う雰囲気があり、私もどこか浮かれた気分になってしまふ。

裏の目的はアクセル殿下の花嫁選びだと噂されているからか、着飾った女性たちが大勢詰め掛けている。

そんな中、私はいつもの地味な侍女服姿。装飾といえは専属侍女であることを示すヘッドドレスくらいだけれど、腰の辺りに普段はつけない徽章をつけている。

今日は夜会をサポートする侍女と侍従全員に、王家の紋章が入ったこの徽章が配られた。これは



警報を発する機能を持つ魔具でもある。

そう、二週間ほど前に私がライトに話したことが、実現したのだ。

まさかこんなことになるだなんて思ってもみなかったけれど、ライトからレイド様に話してもらった時には、レイド様も『いい考えだ』とほめてくださった。

徽章きしょうについては飾り紐ひもを強く引くと、警備本部である騎士団の詰め所に連絡が行く仕組みだ。

騎士団の詰め所には、城内の地図が描かれた石盤が設置されていて、それには魔具を持っている人の位置が表示される。警報が鳴ると同時に、その魔具の持ち主の居場所が点滅するので、そうになったら近くにいる騎士様が急行する手はずになっていた。

夜会が始まる直前、私はその詰め所へと向かう。そこで待機している騎士様たちのために、お茶や簡単につまめる軽食を準備していたら、レイド様が声をかけてきた。

「今日、この徽章を侍女や侍従に配布した時、彼らの口から過去のトラブルについての話がいくつも出たそうだ。報告する手段や機会がなかったために、誰にも伝えることができずにいたようだな。やはり彼らにも、こうした自衛手段や助けを呼べる手立ては必要だったと思う」

聞けば、酔ったお客様に絡まれたり、具合の悪そうな貴婦人を暗がりほせに連れて行こうとした男性客と揉めたり、虫の居所が悪いお客様に罵声ののしりを浴びせられたり……。一つ一つは小さなことだけれど、下手をすれば大きなトラブルに発展しかねない。

そうなった時、騎士様がすぐ来てくれるなら心強いということで、魔具は侍女や侍従の人たちに好評なようだ。

そう話してくれたレイド様の前には、白い大理石の石盤がある。それはかなり重そうで、ここに設置する際、アクセル様が配下の術者二人に浮遊の術で運ばせていた。

「この大きさと重さは、改善の余地ありだねえ。まあ、今回は即席で作ったものだから、我慢して使ってくれ。軽量化と小型化については、今後なんとかするよ」

そう。これらの魔具を考案したのはアクセル様だった。そして警報機のほうを徽章に模して目立たないようにしたのはユリアさんなのさそうだ。

ライトに聞くと、「追跡の術の応用らしい」ってことだったけれど、何をどう応用するとういうものが生まれるのか、私には全然わからない。やっぱりアクセル様やユリアさんは、私たちとは頭のつくりが違うのかも。

こんなすごいものをたったの二週間で作り上げてしまうなんて、二人はすごい術者なんだなあと思ってしまう。

でも、彼ら自身が研究の成果を見るのは難しそうだ。今日ユリアさんはずっと研究所にいるって言うし、アクセル様も花嫁選びでそれぞれどこじゃないはず。

そうこうしているうちに、空が赤から紺へとゆっくり変わっていった。城内の明かりがいつもよりまぶしい。外から見たら、夜空に浮かぶサンクエディア城は、きつとすぐく幻想的できれいだろうな。

騎士団のある西棟に戻る途中、遠くからとどろくような拍手の音が聞こえた。

さあ、夜会の始まりだ！

とはいえ、私はいつも通り団長室でお留守番。何か仕事があれば、通信用の魔具で連絡が来ることになっている。

片付けや書類整理はすでに済ませたので、今は特にやることはない。こんな夜に来客もないだろうから、私は王宮侍女規範と呼ばれる分厚い教本を開いてみた。

この本には、侍女の心得が書いてある。もらってから一年も経っていないけれど、赤い表紙の角が擦り切れるぐらい、何度も何度も読み返した。

すでに中身は頭の中に入っているものの、最初のページをめくると、身が引き締まる感じがするから不思議だ。それに、読み返していくうちに、「ああ、あれはこういうことだったんだ」って気づくこともあるから、面白い。

ページを一枚ずつめくりながら、ゆっくり読み進めていく。時おり顔を出す騎士様に対応しては、またページをめくって――

そんな静かな時間が流れていたのに、不意に通信用の魔具から鈴のような音が聞こえた。魔石部分に触れると、相手と通話ができる。

聞こえてきたのは、初老の小隊長さんの声だった。

『アーシエか？ すまない、詰め所のお茶の缶をひっくり返してしまったんだ。代わりのお茶を持ってきてもらえるかな？』

「わかりました。すぐに参ります」

私はお茶の缶を抱えて団長室を出た。

詰め所に着いた私に「申し訳ない」と言っ、頭をかく小隊長さん。私は「気にしないでください」と返して、茶葉を補充した。

少し離れたところでは、レイド様が通信具を耳に当て、ひっきりなしに指示を飛ばしていた。レイド様の前に置かれた大きな石板が、時折ちかちかと光を放っている。

ちなみに、ここにライトの姿はない。現場の責任者としてホールにいるはずだ。

やがてレイド様が私に気づいて、声をかけてきた。

「アーシエ、ご苦労」

「お疲れ様です。お茶はいかがですか？」

「もらおう」

私はすぐに支度をして、小さなお菓子とともにレイド様の前に置く。レイド様は石板に視線を落とししたまま、あごを押さえて唸った。

「しかし、これは便利だな。侍女や侍従は人数が多いし、城内のあらゆるところを移動する。彼らが監視役になってくれれば、これほど心強いことはない。アーシエはよく思いついてくれたものだ」

「まったくです。これを見ていると、侍従や侍女がよく行き来する場所と、そうでない場所がわかってくる。それがわかれば、騎士の効果的な配置も考えられますからね。大したものだ」

レイド様の隣に座る小隊長にも手放しでほめられ、私は恐縮してしまふ。

「そんな、おおげさです！ まさかこんな大掛かりなことになるとは思わなくて」

「いや、経験からくる意見は貴重だよ。石板のおかげで部下たちとの連携も取りやすいし、混乱もない」

そのまま小隊長と話をしていたら、また石板上でちかちかと赤い光が点滅した。それを見たレイド様が、通信具に向かって「中央棟大臣室に向かう廊下に二人回せ」と呼びかける。

軽食はそれほど減ってないから、もう少ししたらまた様子を見にこようと決めて、私はひとまず詰め所を出た。

ホールの喧騒から離れた廊下は、ずいぶん静かだ。

石造りの回廊、真っ白な壁、いくつも並ぶドア、広い庭。一年前は、お城なんて、物語の中だけのものだと思ってた。一生足を踏み入れることのない場所だと思ってた。

つらいことも悔しいこともいろいろあったけれど、ここにもだんだんできてきている。今はライトのそばが私の居場所だけど、いずれはこのお城自体を、かつての孤児院のように私の居場所だと思える日が来るかもしれない。

こつこつと、石造りの床を歩く靴音が聞こえてきた。廊下の向こうから歩いてくる長身の人は、ライトだ。

金茶色の髪が、魔法のランプのまばゆい明かりを柔らかく反射している。

彼が長い足で歩くたびに、白いマントがふわりと翻って、私は思わず目を奪われてしまった。

立ち止まった私の目の前で、ライトの足もこつと音を立てて止まる。

「どうしたの？」

優しい声と、いとおしそうに細められる瞳に、心臓がどくんと跳ねる。

「茶葉の缶をひっくり返しちゃったっていうから、代わりのお茶を持ってきたの」

「そう。俺はこれから休憩」

「お疲れ様。詰め所に戻る？ 休憩なら、お茶淹れようか？」

「いや……」

甘い笑みを浮かべたライトは、まるでエスコートするかのよう私の手を引いて、近くの空き部屋に入る。

ドアが閉まると同時に腰を引き寄せられた私は、ライトの腕に収まった。

ふわりと鼻をくすぐる彼の香りに、頭がしびれる。厚い胸と、私の背中にしっかりと回された腕に、どきどきが止まらない。

「お茶よりも、こつちのほうが癒やされるかな」

耳にかかる吐息がくすぐったくて、思わず首を竦める。すると、耳朶にキスされて、ぞくりとした。

「だめ……まだ仕事中……」

「わかってるよ。だから少しだけ」

彼の胸に手をつき張って離れようとしたけれど、両手を取られて壁に押し付けられてしまった。

至近距離からこちらを覗き込むブラウンの瞳に、ちらちらと見え隠れする炎は、抑えきれないライトの欲望。

彼は薄い笑みを浮かべて、私の唇を軽く舐めた。うなじの辺りに、寒気に似た感覚が走る。

「こういうの、久しぶりだね」

「そうだけど……」

ライトの瞳が服の下に隠された私の素肌を暴いている気がする。恥ずかしくて、逃げるように視線を逸らすと、すぐに抱き締められた。

ライトが私のスカートを軽く上げて、両足の間に自分の片足を割り込ませる。

「何するの……っ、やだっ！」

こんな風に仕事中に触られることなんて、最近はなかった。だから余計に恥ずかしくて、触られているところから火が出そう。

耳に歯を立てられて、膝が抜けそうになる。一瞬ふらついた体を支えてくれたライトの手が、そのまま私の体のラインをなぞった。

「は、ん……！！ やめて……」

必死に声を絞り出すと、頬に手をかけられて、上を向かされる。

ライトの薄い唇が私に見せ付けるように、ゆっくりとカーブを描いた。

足を閉じようと力を入れると、その間にあるライトの足に太腿を擦りつけているみたいになって、余計に恥ずかしくなる。

そこでライトが舌打ちをした。

「残念、時間がないな」

そう言うなり唇をキスで塞がれ、深くむさぼられた。引きずり出された舌先を軽く噛まれると、ぎゅっと閉じたまぶたの裏に火花が散る。

体を離れたライトが、私を舐めるように見下ろしながら、優しく頬を撫でてくる。

私は乱れた息を整えながら、力なくライトを見上げた。

「ありがと、元氣出た。一度詰め所に顔を出したらホールに戻る。なんかあったら、遠慮なくこれを使うんだよ」

そう言っつて、私の腰の辺りについた徽章をぼんぼんと叩くと、ライトはにこりと笑う。そして身を翻し、そのまま部屋を出て行った。

それを見送ったとたん、私はその場にへたり込んでしまう。

昔は、こんなことがよくあった。物陰に引きずり込まれて、抱きしめられて、キスされて……時には、それ以上のことまで要求されて。それこそ一日に一回はあったのだ。

だけど、今は仕事中にこうして絡まれることは少なくなっていた。それがよりにもよって今日、ライトがこんな風に触れてくるなんて思わなかったから、余計に甘いダメージが残る。

「手、震えてる……」

体の熱が引くのを待って、私は立ち上がる。雲を踏むようなふわふわとした足取りで、私は団長室に戻った。

誰もいないはずだと思っていたから、ノックなしでドアを開けた。そのドアを閉めてから顔を上げた私が、その場で固まってしまったのは、仕方がないことだと思う。

「すまない、お邪魔してるよ」

来客用のソファにだらりと寝そべって、けだるそうに手を上げたのは――

「ア、アクセル様!? 何してらっしゃるんですかー!?」

本日の夜会の実質的な主役であるはずの、第二王子アクセル様だった。

アクセル様は、王太子のラズウェル様より三歳年下だ。姿かたちは兄弟でよく似ているけれど、髪の色と雰囲気は違う。

ちなみにラズウェル様は金髪で、アクセル様は銀髪。そして雰囲気はラズウェル様がワイルド俺様系なら、アクセル様は穏やか草食系ってところかな。

幼少の頃から魔術に秀でていたというアクセル様は、国内に並ぶ者がいないと言われるほどの大魔術師だ。

同じ魔術師のライトに言わせると、『あいつはバケモノだ。俺なんかあいつの足元にも及ばない。やつてらんねえよ』だそうだ。

そんなアクセル様は、サンクエディア王国の魔術師団長であると同時に、王立魔術研究所の総帥という肩書きも持っている。

新しい魔術の開発、古代魔術の解析、魔具の開発、魔法薬の研究、古代遺跡の探索や保護など、そのお仕事は多岐にわたると聞く。

政治的なことにはあまり関心がないというか、むしろ魔術に関することにしか興味を示さない。

その探究心はすごいけど、ちょっと危ない方向に行ってるんじゃない? って思う時もある。私も猫の姿だった時、危うく研究対象として連れ去られるところだった。

魔術さえ絡まなければ、いい人なだけだね。

「ちょっと休憩しに来ただけだよ。別に気にしなくていいから」

すっかり気の抜けた声で言いながら、ソファでごろごろしているアクセル様。すごい立場の方だということを忘れてしまいそうなほど、だらけきっている。

豪華なジャケットがしわになっっているのも、勲章が体の下敷きになっているのもおかまいなしだ。夜会に対してうんざりしているのを隠そうともしない。元々女性にはそれほど興味がないと聞いているし、結婚話なんて面倒なだけなんだろうなあ。

今日私はホールに入っていないから、どういう状況かはわからない。けれど、たぶん貴族のお嬢様たちに囲まれっぱなしで、気が休まる暇もなかったんだと思う。

「お気持ちはわかりますけど、いくらなんでも、主賓が途中で抜け出すのはまずいんじゃないですか?」

「俺は、主賓じゃない。それに逃げたんじゃなくて、休憩だから」

一言一言を区切りながら、やけに力を込めて否定するアクセル様は、まるで子供みたいだ。こういうところ、お兄様のラズウェル様とよく似てるから、やっぱり兄弟なんだなあ。

「でも、王妃陛下がそんな簡単に退室をお許しになるとは思えないんですけど。姿隠しの術でも

使って抜け出したんじゃないんですか？」

「なあって突っ込むと、アクセル様は無言でごろりと寝返りを打ち、私に背中を向けた。……凶星か。」

「まあ、気持ちはわからないでもないけどね。前にラズウェル様と一緒に出た夜会の時も、女性たちはまるで狩人のように、アクセル様に熱い視線を送っていたもの。」

「……仕方ないですね、ちよつとだけですよ」

「私は疲れた顔で大きなため息をつくアクセル様に、お茶を淹れて差し上げた。すると、彼はむくりと起き上がる。」

「ゆっくりとした動作でカップを手に取り、香りを楽しむ。そしてお茶を一口飲んでから、ふつと息をついた。」

「おいしいな。エルの淹れるお茶の味に似てる。彼女から教わったんだっけ？」

「はい。おかげさまで、ずいぶん上達したってレイド様からも太鼓判を押していただきました」

「レイド様も、実はお茶に通じていて、舌も肥えている。そのレイド様から合格点がもらえれば、団長室を訪れるお客様に出すお茶としては、申し分ないはずだ。」

「アクセル様はうなずくと、カップを元に戻して私を見た。」

「今回、侍女と侍従全員に配布した魔具のアイディアは、君が出したんだって？」

「私は希望というか、想像というか、あったらいいなってことをライトに話しただけです。それを実現可能なレベルにまで話を膨らませたのは、レイド様とライトとアクセル様ですから」

まさか、たった二週間で正式に導入されるなんて思っていなかった。私には、そっこのほうがびっくりだ。

「アクセル様は、値踏みするみたいな目つきで私を見る。なーんか、猫の姿でいる時に観察されたと、様子が似てるような……。やめてくれないかな、居心地悪いし！」

「いや、そういう発想が出るってところが面白いよね。うーん、やっぱり興味があるなあ。君といると飽きなさそうだよ」

「謹んでご遠慮申し上げます！　っていうか、今はそれどころじゃないでしょうに。そろそろ騒ぎになりますよ？」

「すかさず言い返せば、アクセル様はやっぱり子供のようにな、ぶいっとそっぽを向く。」

「今日の夜会は若い貴族たちが本格的にデビューする前の練習会だ。俺は関係ない」

「暗黙の了解で主賓ですよ。城内も、その話で持ちきりじゃないですか」

「私がそう言うと、アクセル様は深いため息をついて、再びだらりとソファに寝そべった。」

「俺は結婚や女性に、あまり興味がなくてね。ラズは結婚しているし、妹もすでに婚約しているから、別に俺一人くらい結婚しなくても問題ないはずなんだ。けれど、母はそうもいかないらしくてね。本当に参るよ」

「そんな愚痴を聞きながら、私は自分の席に座り、王宮侍女規範の続きを開いた。」

「俺が一向にその気にならないから、母は業を煮やしたらしい。今日は特に押し強い女性ばかりそろえたみたいで、ずっと追い回されてさあ。ダンスだってそんなに好きじゃないのに、一曲終わ

ればもう次の女性が待機していて……いい加減足が痛いし、背中もバキバキだし、うんざりだ」

私が聞いていてもいなくてもかまわないのか、ラズウェル様がぼそぼそと愚痴を言い続ける。

確かに、アクセル様は一人なのに対して、年頃の令嬢はそれこそ何十人と参加している。休む間もなく踊らされていけば、うんざりするのも仕方ないかも。

「でも、お立場的に、そうも言っていられないのでしょうか？ それなら、早く誰かお一人に決めてしまえばいいじゃないですか」

「そう言われてもなあ……。結婚したところで、俺は魔術研究にかまけて、家庭をおろそかにすると思うよ。きつと普通の女性と結婚してもうまくいかないだろうなってわかっているから、なおさら気が向かなくてね。相手の女性もかわいそうだし」

なあんだ、普通に気遣いできるんですね。という言葉は、さすがに失礼なので呑み込んだ。でも次の瞬間、そう思ったことを猛烈に後悔することになる。

「そうだな、君なら俺の仕事のこともわかってくれそうだ。どう？ 俺の結婚相手にならない？」

あー、なんか予想通りの言葉が飛んできた。だからとソファに寝そべったまま起きる気配もないし、とりあえず言ってみただけなんだろうなあ。つてすぐわかるくらいに、やつつけ感ありありの声だった。

「なりませんよ。つていうか、そんな気ざらさらなくせに。第一、私にそんなことを言えばライトが黙っていませんけど、いいんですか？」

そう一気に言い返してやったら、アクセル様は乾いた笑いを浮かべた。

「ははっ、だよねえ。ライトが君を俺に譲るなんてありえないしね。下手するとこつちが怪我しそうだ。あいつ執念深くって粘着質だから、面倒だし」

「わかっているなら、変なことを言わないでください。誰も聞いていないからいいものの、誰かに知られたら大騒ぎになりますよ。私は巻き込まれるのはごめんですし、ライトの耳に入ったら、大変なのはこつちなんですから」

「手厳しいなあ」

私が思いつきりしかめっ面をしながら言うと、アクセル様は苦笑した。

そこでふと思いつき立ち、私は提案する。

「ユリアさんはどうですか？ 同じ研究者同士ですし、アクセル様のことを一番理解なさっていると思いますけど」

ところが、その名前を出したとたん、アクセル様のまとう空気が変わった。今までの投げやりな様子から一転、まじめな顔で首を横に振る。

「いや、ユリアは大切な部下だ。俺と結婚なんかしたら、王族の仕事にかかわらなければならなくなるだろう？ そんなもの彼女には向かないし、それより研究を続けてもらいたい。だからユリアとの結婚は考えていないよ」

アクセル様、自分では気づいてないみたいだけれど、ユリアさんを巻き込みたくないって言っているように聞こえる。何よりもユリアさんを優先しちゃってるってこと、わかっているのかな？

その時、ノックの音とともに、ルチアさんが入ってきた。ソファの上にいる人を認識した瞬間、

彼女はあわてて姿勢を正して、びしりと敬礼する。

「しっ、失礼しました！ アクセル様がいらっしゃるとは思わず……！」

「ああ、隠れてるだけだから気にしないで。勝手にお邪魔してるのは俺のほうだ、悪いね」

「やっぱり逃げてきたんだ……」

「うるさいな、いいだろう？ ちょっとくらい」

私の突っ込みに、アクセル様がしかめっ面つらで言い返してくる。ほんと、子供っぽいなあ。

ルチアさんはそんなアクセル様にびっくりしていた。けれど、敬礼を解くように促うながされ、少しほっとした様子で私に書類を差し出す。

「これ、休憩室警備の第二班の報告書。第三班はこれから交代して、私が報告書をまとめるから提出は明日になる」

「わかりました、レイド様に伝えます」

「うん、よろしく。……では失礼します」

「ちょっと待って」

ルチアさんが退室しようとしたその時、何かを考えながら彼女の動向を見守っていたアクセル様が、不意に呼び止めた。

「君、名前は？」

「はい、騎士団第五小隊所属のルチア・ウエスターと申します」

にわかに緊張感を増したルチアさんが、戸惑いながらも答える。

「ウエスター……というと、確か男爵家だったかな？」

「はい、父はフォルクス・ウエスター男爵です」

「そうか。……ありがとう」

突然の質問に怪訝けげんな顔をしながら、ルチアさんは退室した。

その後、アクセル様は十分ほど団長室にいたけれど、最後まで何やら考え込んでいる様子だったのが気になった。面倒事にならなければいいけど……

アクセル様が「お邪魔したね。お茶、ありがとう」と言って出て行ったのとほぼ同時に、ライトから連絡が来た。

『アーシエ、アークがいらないんだけど、見かけなかった？』

私はその問いに、なんにも考えず素直に答えてしまったのだ……

「さっきまでいたよ」

『どこに？』

『どこって、団長室。……あ』

通信具の向こうで、明らかに空気が変わったのがわかる。気温が一瞬で氷点下になって、猛吹雪が吹き荒れてる……！

『ふうん。団長室で、二人きりでいたんだ』

「いえ、あのっ！ ちょっと休憩したいって言うから、お茶をお出しただけっ！」

『へえ、お茶をねえ？ 二人で楽しくやってたんだね』



「ちつ、違うの！ 途中からルチアさんもいたし！」

『ああそう。じゃあ、アークはどのくらいの間そこにいた？』

「えっと、その……二十分くらいだよ！」

『で、ルチアは？』

「あ、う……！」

『ルチアは？ 何分？』

「に、二、三分……」

『へええええ。俺が一生懸命仕事している間に、他の男とそんなに長いこといちやついてたつてわけか』

「ただだから、違うの！ 何もなし、たまたまだよ！」

『俺は警備の合間の、ほんのわずかな時間しか君に会えなかったっていうのに、アークとはそんなに長い間、二人きりでいたんだね』

「だって、団長室に戻つたらいたんだもの！ 仕方ないじゃない！」

『俺は君に満足に触れもしなかったのに、他の男とはよろしくやってたんだ。そうか、よくわかった』

「だから、違うって言うてるのにー!!」

必死で言い訳したけれど、次々と畳み掛けられ、私はあつという間に追い詰められてしまう。

こうなるってわかっているのに、毎回同じことしてるあたり、自分の学習能力のなさに泣きたくな

る。ライト以外のことだったら、もう少しうまくできるのにー！

そして、ついに彼の口から決定的な一言が発せられた。

『……これは、お仕置き決定だね。今夜、眠れると思うなよ？』

地を這うような低い声を半泣きで聞きながら、私は引き出しから休暇届を出して、明日の日付を記入していた。

ライトの部屋の広いベッドで抱きつぶされた翌日、私は一日中ライトへの恨み言をこぼしつつ過  
ごす羽目になった。

だるいし、体の節々は痛むし、まだ熱が抜けきっていない感じで、とてもじゃないけど、お仕事  
には行けそうもなかった。

心ゆくまで私にお仕置きしたライトの、満足そうな背中。それをベッドの中から見送りながら、  
涙するしかなかったのだ。

アクセル様が勝手に押しかけてきてただけなのに！ 不可抗力なのに！ 私はなんにも悪く  
ない！